

※録音時に応募名を名乗ってください。

新美南吉 作「うた時計」

ふたりは大きな池のはたに出た。むこう岸の近くに、黒く二、三ばの水鳥がうかんでいるのが見えた。それを見ると少年は、男の人のポケットから手をぬいて、両手をうちあわせながらうたった。

「ひいよめ、

ひよめ、

だんご、やアるに

くウぐウれッ」

少年のうたうのを聞いて、男の人がいった。

「いまでもその歌をうたうのかい？」

「うん、おじさんも知っているの？」

「おじさんも子どものじぶん、そういつて、ひよめにかかったものさ」

「おじさんも小さいとき、よくこの道をかよったの？」

「うん、町の中学校へかよったもんさ」

「おじさん、また帰ってくる？」

「うん……どうかわからん」

道がふたつにわかれているところにきた。

「坊はどっちイいくんだ」

「こっち」

「そうか、じゃ、さいなら」

「さいなら」

少年はひとりになると、じぶんのポケットに手をつっこんで、ぴよ
こんぴよこんはねながらいった。

「坊ウ……ちよつと待てよオ」

遠くから男の人がよんだ。少年はけろんと立ちどまって、そつちを
見たが、男の人がしきりに手をふっているの、またもどつていった。

「ちよつとな、坊」

男の人は、少年がそばにくると、すこしきまりのわるいような顔を
していった。

「じつはな、坊、おじさんはゆうべ、その薬屋のうちでとめてもらっ
たのさ。ところがけさ出るとき、あわてたもんだから、まちがえて、
薬屋の時計を持ってきてしまったんだ」

「……………」

「坊、すまんけど、この時計とそれから、こいつも（と、がいとうの内かくしから、小さい懐中時計かいちゅうどけいをひっぱり出して）まちがえて持ってきたから、薬屋に返してくれないか。な、いいだろう？」

「うん」

少年はうた時計と懐中時計を、両手にうけとった。

「じゃ、薬屋のおじさんによろしくいってくれよ。さいなら」

「さいなら」

「坊、なんて名だったっけ」

「清廉せいれん潔白けつぱくの廉れんだよ」

「うん、それだ、坊はその清廉……なんだっけな」

「潔白だよ」

「うん潔白、それでなくちやいかんぞ。そういうりっぱな正直なおとなになれよ。じゃ、ほんとにさいなら」

「さいなら」

少年は、両手に時計を持ったまま、男の人を見送っていた。男の人はだんだん小さくなり、やがて稲積いなづみのむこうに見えなくなってしまう。少年はてくてくと歩きだした。歩きながら、なにかふにおちないものがあるように、ちよつと首をかしげた。

まもなく少年のうしろから自転車が一台、追っかけてきた。

「あッ、薬屋のおじさん」

「おう、れんぼう廉坊、おまえか」

えりまきであごをうずめた、年よりのおじさんは、自転車からおりた。そしてしばらくのあいだ、せきのためものがいえなかった。そのせきは、冬の夜、かれき枯木のうれをならす風の音のように、ヒュウヒュウいった。

「廉坊、おまえは村から、ここまできたのか」

「うん」

「そいじゃ、いましてがた、村からだれか男の人が出てくるのと、いっしょにならなかったか」

「いっしょだったよ」

「あッ、そ、その時計、おまえはどうして……」

老人は、少年が手に持っているうた時計と懐中時計に目をとめていった。

「その人がね、おじさんの家でまちがえて持ってきたから、返してくれっていったんだよ」

「返してくれろって？」

「うん」

「そうか、あのばかめが」

「あれ、だれなの、おじさん」

「あれか」

そういつて老人は、また長くせきいった。

「あれは、うちの周作^{しゅうさく}だ」

「えッほんと？」

「きのう、十なん年ぶりで、うちへもどってきたんだ。ながいあいだ悪いことばかりしてきたけれど、こんどこそ改心して、まじめに町の工場ではたらくことにしたから、といってきたんで、ひと晩とめてやったのさ。そしたら、けさ、わしが知らんでいるまに、もう悪い手くせを出して、このふたつの時計をくすねて出かけやがった。あのごくどうめが」

「おじさん、そいでもね、まちがえて持ってきたんだってよ。ほんとにとつていくつもりじゃなかったんだよ。ぼくにね、人間は清廉^{せいれん}潔^{けつ}白^{ぱく}でなくちゃいけないっていったよ」

「そうかい。……そんなことをいっていったか」

少年は老人の手にふたつの時計をわたした。うけとるとき、老人の

手はふるえて、うた時計のねじにふれた。すると時計は、また美しくうたいだした。

老人と少年と、立てられた自転車、広い枯野かれのの上にかげを落とすて、しばらく美しい音楽にきき入った。老人は目になみだをうかべた。少年は老人から目をそらして、さつき男の人がかくれていった、遠くの、稲積の方をながめていた。

野のはてに、白い雲がひとつういていた。